この学びに関するSDGsの目標

5 ジェンダー平等を実現しよう

大学の学び

地域社会で問題解決の経験を積んだ後、身近にあるジェンダー問題の解決に挑む

仁愛大学　人間学部　コミュニケーション学科　織田ゼミ

SDGsの枠組みで、学科の学びを横断的に整理

仁愛大学人間学部コミュニケーション学科は、国際化が進む社会で、地域や産業界のリーダーとして活躍するためのコミュニケーション能力の育成を目指している。

1年次は、コミュニケーションの理論や実践、社会学や英語などを広く学び、2年次から「企画・マネジメント」「英語コミュニケーション」「情報社会」の3コースに分かれて専門性を高める。同学科の企画・マネジメントコース4年の髙倉美知瑠（みちる）さんは、入学動機を次のように話す。

「好きな英語の学習を通じてコミュニケーション能力を高めながら、幅広く学ぶ中で自分が興味を持てる分野を見つけたいと考え、本学科を志望しました」

同学科では、学生が学びの位置づけを捉えやすくするため、2018年、「コミュニケーション学科型SDGsの開発～地域連携教育の実践と体系化～」として、学科内の学びをSDGsの枠組みで横断的に整理。目標達成に向けてグローバルな視点を持ちながら、ローカルな課題を考え、行動できる当事者意識を育むため、地域連携教育を重視している。

私たちが紹介します

人間学部　コミュニケーション学科　企画・マネジメントコース4年
髙倉美知瑠（たかくら・みちる）
福井県立福井商業高校卒業。

人間学部　コミュニケーション学科　情報社会コース3年
長谷川舞実（はせがわ・まいみ）
福井県立福井商業高校卒業。

学内や地域で問題解決を重ねSDGsに当事者として向き合う

同学科情報社会コース3年の長谷川舞実（まいみ）さんは、高校時代にボランティアとして地域イベントに参加し、その楽しさや意義を実感。「次は自分で企画し、主催者側として運営したい」と考えて、地域社会との協働が活発な同学科に入学した。

2年次の「フィールドワーク演習」では、同大学のキャンパスがある福井県越前市武生（たけふ）地域の特産物の魅力を発信するイベント「武フェス」を、地域活性化団体とともに企画・運営した（写真1）。

「地域イベントは、地域社会のよさを再発見する機会になり、特に地域の子どもにとっては、『この地域で暮らしていきたい』といった思いにつながると感じました。また、私は主催者の一員として、不測の事態に冷静に対処する力が身についたと思います」（長谷川さん）

髙倉さんも、2・3年次の「プロジェクト・デザイン基礎／演習」の授業で、イベントの企画から運営ま

写真1　長谷川さんの所属するグループが企画・運営を担当した「武フェス」では、越前和紙で作ったランタンを会場に設置して、特産品をアピール。来場者数は予想を大きく上回り、盛況だった。

この学びに関する他のSDGsの目標

4 質の高い教育をみんなに

8 働きがいも経済成長も

10 人や国の不平等をなくそう

で実践した。

「地域を活性化するイベントの企画・運営などを通して、自分は周囲の意見をまとめるのが得意なことに気づき、他の授業のグループワークでも、まとめ役を意識して務めるようになりました」

そのように、学内や地域などの場で問題を発見し、その解決策を考え、実行することを繰り返す。そうした経験は、SDGsに当事者として向き合う姿勢にもつながっている。

身近な気づきをジェンダーの視点から分析

3年次からはゼミに所属して実践的に学び（＊）、4年次は卒業研究に取り組む。

織田暁子准教授のゼミでは、SDGsの「**目標5　ジェンダー平等を実現しよう**」を始め、男女平等や性の多様性が尊重される社会の構築に資する研究を行っている。

髙倉さんは、1年次に履修した「共生社会論」で、ジェンダーや社会階層をキーワードに、マイノリティーの人々が直面する問題について学んだ。それを機に、ジェンダー問題に関心を持ち、織田ゼミに入った。現在は、「現代の若者の恋愛事情」をテーマに卒業研究に取り組んでいる。

「以前に比べ、大学で学ぶ女性が増え（**目標4**）、出産後も正社員として働き続ける女性が増加するなど（**目標8**）、性別による役割や分業の意識が変化し、それらの目標は改善傾向にあります。そうした中、若者の恋愛観や結婚観がどのように変化してきたのかに関心を持ちました。1980年代～90年代に行われた恋愛観や結婚観の調査結果を文献から調べ、私がこれから行う学生を対象としたアンケート結果と比較し、考察を深めていきます（**写真2**）」

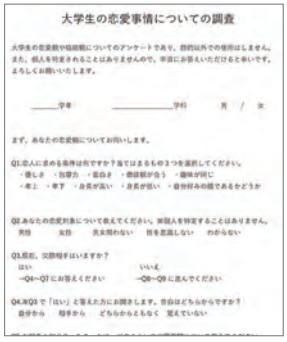
大学生の恋愛事情についての調査

写真2　髙倉さんの卒業研究では、学生を対象に、恋愛や結婚などへの価値観を調査予定。

長谷川さんが織田ゼミに入ったきっかけは、学校祭で同ゼミが性の多様性に関するイベントを主催していることを知り、授業でLGBTについて学んだことをイベントを通して多くの人に伝え、ジェンダー問題を深めたいと考えたからだ。現在の研究テーマは、テレビ番組を見て覚えた違和感から設定したという。

「化粧をした女性アスリートの映像を見た一般の人々から、『アスリートの爽やかさがなくなった』『化粧をする暇があるなら競技に集中すべき』といったコメントが寄せられていました。その一方で、ことさらに『美人アスリート』がもてはやされる風潮もあります。そうした状況は、スポーツには「男らしさ」のイメージがあり、「女らしさ」は求められていないことやスポーツが男性中心の世界であることに要因があるのではないかと考え、ジェンダー平等（**目標5**）を掘り下げて研究しています」

長谷川さんは、「この研究が、性別を問わずに自分らしく生きることを少しでも後押しできるような内容（**目標10**）になることを目指したい」と意気込む。髙倉さんは、卒業後は民間企業への就職が決まっている。

「仕事では、大学で身につけた企画力やコミュニケーション力を発揮したいです。また、自分らしく生きることを追い求めるとともに、周囲の人が悩んでいる時に相談に乗れるような人でありたいと思います」

学びとSDGs

身近な「あたり前」を疑うことが、グローバルな問題の解決につながる

人間学部
コミュニケーション学科
准教授
織田暁子
おだ・あきこ

人は、自分の知る世界を「あたり前」と考えがちですが、それが偏った思い込みであることは、少なくありません。その分かりやすい例がジェンダーです。「男性らしさ」「女性らしさ」にとらわれると生きづらさを感じたり、社会的な不平等をもたらしたりすることがあります。

私のゼミでは、身近にある「あたり前」を社会学やジェンダーの視点から分析し、ほかの人はどのように考えて行動しているのか、自分が当然と思うのはなぜなのかなどを探っていきます。

身近な問題を扱うからこそ、客観的な根拠に基づいて論じることを大切にするよう学生に伝えています。そのため、文献の講読を通して社会学の知識や統計の読み方、論文の書き方などを習得し、さらには統計やアンケート調査などの計量的な手法を用いて社会を分析するスキルなどを身につけます。

そうして身近な問題について考え、行動する経験は、SDGsのようなグローバルな課題に取り組む力にもつながっていくと考えています。

＊ ゼミは、コースに関係なく選択することが可能。